

秋田遠景近景

日銀秋田支店長コラム

県内各地で開催された高校生の文化部の祭典、第50回全国高校総合文化祭「あきた総文2026」を一人の観客として楽しませてもらった。

今回が記念すべき50回目ということは、自分が高校生の時代には既に存在していたはずだが、恥ずかしながら認識の薄いまま本県開催を迎え、初めて多くの事実を知った。

まず一つは、1977年に開かれた第1回大会は参加117校、参加人数3700人程度だったのが、あきた総文では全22部門に参加3千校以上、参加人数も約2万人と大きな成長を遂げたこと。

さらに、文化部のインターハイと称されるだけあり、多くの規定部門で審査が行われ、中でも演劇、日本音楽、郷土芸能の各部門で最優秀賞を取った学校には東京公演の機会が与えられること。

一方、別に全国大会のある吹

あきた総文

奏楽部門はコンサート形式で開かれ、多くの学校がリラックスしたパフォーマンスを見せていること一などなど。

私も開会式とパレードこそ中継で視聴したもの、秋田市内での写真部門、器楽・管弦楽部門、吹奏楽部門に加えて大館市での演劇部門にも足を延ばし、時間の許す限り回ってみた。連日本紙でも報じられていたように、高校生とは思えないレベルの高い作品ばかりであった。

高校生の情熱に感動

特に演劇部門では、母娘の相克をミュージカル仕立てにした作品やハンセン病患者の生涯を題材にした作品などに触れ、その完成度に驚かされた。また、大会期間中に被災した熊本県の代表校のステージには観客から



ひととき大きな拍手が送られたほか、高校生仲間からも素早く連帯のメッセージが示されるなど、温かな気遣いの一端も感じられた。

さらに価値を高めていたのは、ほぼどの部門にもプロを審査員として招聘し、専門家目線での審査が行われていたことだ。写真部門では、写真家でもある高橋智史氏が、受賞作品への惜しみない賛辞とともに、社会性のあるフォトジャーナリス

県全体に相応の好影響が見込まれる。約2万人の参加者が少なくとも期間中に1泊し、お土産も1人2千円は購入、移動の際に県内交通機関へ5千円程度支出したと仮定し、県のホームページに記載されている産業連関表を用いて試算すると、最低でも5億円ほどの経済波及効果が算出できる。

また、県内外からの観光客を昨年のかがわ総文並みの5万人から、本県が想定する10万人と

ムや長期的視野に基づくルポルタージュ作品の少なさに懸念を示した。文芸部門の公開句会では、俳人の堀本裕樹氏が遠慮なく、一番ダメだと思った俳句に「逆選」を付けるなど辛口の忌憚の多い批評も行われていた。プロがこれだけ自分の作品に真剣に向き合い、フィードバックしてもらえた経験は、さらに高みを目指す高校生にとつての財産になるだろう。

見込んで、さらに効果を上乗せすると、8億円から10億円といった数字もあり得るだろう。あきた総文には県予算も総額6億円ほど割り当てられているが、経済効果的には支出に十分見合うイベントだとの評価も可能だ。

ほかにも、会場の外では、少子化による入学減少に悩む各大学がのぼりを立てたり、ブースで魅力を高校生にアピールしたりする様子もうかがえた。まさしくここでも、貴重な高校生

という人材を巡る獲得競争が行われており、世相を感じさせた。もちろん本県開催ゆえの苦労もあつたことだろう。会場で聞いてみると、日本海側から参加した高校生は、他の部員や教員ともども、前日バスで8時間の長距離移動をこなして秋田入りし、会場入りやリハーサルも分刻みのスケジュールで、他の高校のステージを楽しむ余裕はあまりなさそうだった。

観客側はともかく、主役であるべき高校生の負担は重かったかもしれない。それでも、クマの出没情報を含めて本県のことを事前に調べ、限られた時間でも秋田の魅力に触れてくれた若々しい感性が全国にこれだけ多く生まれたことに感謝したい。

「あきた総文2026」を支えた関係者の方々、特に実行委員会に名を連ねた本県高校生の皆さん、本当にお疲れさまでした。皆さんの情熱のおかげで、素晴らしい1週間を堪能させていただきました。ありがとうございました。ありがとう！（種村知樹・日本銀行秋田支店長）

〈随時掲載〉